栄華を極めた貴族たちとつながることができるようになったのです。黒田家にも歌銘を伴う瀬戸肩衝茶入銘「辰市」**（No.19）**が、遠州自筆の和歌を記した掛軸**（No.20）**とともに伝来します。和歌は「なき名のみ　たつの市とはさわけとも　いさまたひとを　うるよしもなし」という『拾遺和歌集』に柿本人麿の作として収録されるものです。銘にもある辰市とは、奈良県にあった古代の市場のことで、和歌の文意は、周りは辰市のように騒がしいけれど、恋しい人を得ることはできないものだ、という悲恋を嘆くものです。釉薬がしっとりと流れ落ちる様子に武張っていても本当はか弱い男心を見出したのでしょう、遠州の非凡なセンスがうかがわれます。

もちろん、遠州も利休や織部と同様に新作の茶道具にも創意を発揮しています。その際、遠州の典雅な感覚が造形にいかされたことはいうまでもありません。今日、遠州好みの茶道具の代表格にあげられるのが、黒田家の御用窯であった高取焼です。忠之は遠州のもとに工人を派遣するなどして、遠州の指導を仰ぎ遠州の美意識を反映した茶道具を制作させることに尽力しました。その結果、遠州高取と呼ばれる優美で洗練された茶道具へと結実します。その中でも、高取掛分下面取茶碗**（No.21）**には、遠州の美意識が最も良く表れています。**No.19**でも見られた流れ落ちる釉薬が作るしっとりとした景色は一層洗練の度を高めており、遠州好みの造形がいかなるものであったのか、はっきりと示しています。

遠州好みの茶道具は泰平の世に誠に相応しく、時代を超えて強い規範性を持つことになりました。

終わりに　もっと詳しく知りたい方へ

これまで、利休・織部・遠州といった茶人の好みを通して茶道具の歴史をたどってまいりました。なんだか難しい茶道具の世界も、人の視点を介して見ることで随分と身近に感じられたのではないでしょうか？残念ながら、ここでご紹介できた茶人はほんの一部です。もっと詳しく知りたいという方は、以下に本展企画に際して参照した文献を記しておりますのでご覧ください。なお、これらの文献は全て２階の美術情報コーナーで読むことができます。ぜひ足をお運びください。

［学芸員　宮田　太樹］

主要参考文献

- 『小堀遠州の茶会』根津美術館　1996年
- 千宗室監修　谷晃編『茶道学大系　第五巻　茶の美術』淡交社、2000年
- 『名物裂　渡来織物への憧れ』五島美術館、2001年
- 『茶道誌　淡交No.730【第59巻増刊号】　茶人と茶道具　名器をめぐる茶人群像』淡交社、2005年
- 『芸術新潮　2013年11月号　特集　利休と名碗』新潮社、2013年
- 榎本徹監修『古田織部四〇〇年忌　大織部展』岐阜県現代陶芸美術館、2014年
- 『別冊太陽　日本のこころ251　茶の湯　時代とともに生きた美』平凡社、2017年
- 赤沼多佳監修　『特別展　茶の湯』東京国立博物館、2017年

次回展示予告

［企画展示室］

◆仙厓―小西コレクション

10月1日（火）- 12月1日（日）

2016年度に小西昭一氏よりご寄贈いただいた、仙厓の書画および遺愛の品々をご紹介いたします。初公開の作品も多数。博多の仙厓さんの新たな一面に触れてください。

仙厓義梵筆
《すす玉名人図》

［松永記念館室］

◆秋の名品展

10月1日（火）- 12月1日（日）

秋の風趣に相応しい松永コレクションの名品を精選。松永耳庵が秋の茶会の定番としていた尾形乾山筆《花籠図》、《柿蔕茶碗 銘白雨》などを展示します。

尾形乾山筆
《花籠図》
（重要文化財）

福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051　福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051（代表）　FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

茶人の「好み」

会期　2019年7月30日|火|-9月29日|日|

会場　松永記念館室

出品No.8　長次郎作　黒楽茶碗　銘「次郎坊」

出品No.12　黒織部沓茶碗　銘「浜千鳥」

「好み」とは茶人が生み出した独自のデザインをさす言葉です。また、道具の取り合わせや点前の作法といった、茶事にかかわる美意識全般をさすこともあります。茶人たちは時代による価値観の変遷を意識しながらも、様々に創意を発揮することで独自の茶風を実現しました。それらは、同時代、あるいは後世の人々によって、その茶人の名を冠した「～好み」と称され、茶の湯の美意識における規範にもなっていきました。

本展では、茶道具に対する美意識の変遷をたどりつつ、利休・織部・遠州の好みに焦点をあてて紹介します。

1章　唐物から侘びへ

茶道具に対する美意識は室町時代から現れ始めますが、その形成に大きく関わったのが、時の最高権力者であった足利将軍家や、それと関係の深い寺院や大名でした。彼らが特に好んだのが唐物と呼ばれる舶来品で、陶磁器においては宋時代の天目茶碗**（No.1）**が、そして、絵画においては馬遠や夏珪といった南宋の宮廷画家、あるいは、牧谿をはじめとする宋から元時代に活躍した画僧の作品**（No.2）**に代表される唐絵**（No.3）**が珍重されました。足利将軍家のコレクションは、同朋衆と呼ばれる目利き集団によって評価分類され、こうした将軍家の定めた価値判断の基準が茶道具に対する美意識にも大きく作用したのです。

ところが、15世紀後半に起こった応仁の乱（1467－78）によって足利将軍家の権威が失墜する中で、こうした状況にも変化が生じます。新たな時代の担い手となる豪商がこの頃から急速に力をつけ、それまで権力者のたしなみであった茶の湯を楽しむようになっていきました。

彼らの中には、足利将軍家から流出した唐物を求める者がいた一方で、自身の境遇や心のあり様を踏まえた上で道具を選び出す、いわゆる「侘び」の精神を茶の湯に持ち込む者も現れます。後者の茶風を主導したのが、村田珠光こと珠光（1423－1502）や武野紹鷗（1505－55）といった茶人で、彼らは雲一つない満月のような理想的な境地ではなく、雲間に見え隠れする月のような移ろいやすい不完全なものに美を見出していたようです。

こうした精神に導かれるように、均整の取れた隙のない造形を持つ唐物よりも、洗練されていないが素朴な味わいを持った高麗物**（No.4）**や和物**（No.5）**が好まれるといった具合に茶道具に対する価値観が変化していきました。茶の湯に深い精神性を求めるようになったことも関係するのでしょう、多くの茶人が高名な禅僧へと弟子入りするようになります。それに伴い、唐絵だけでなく禅僧の手による書**（No.6,7）**も茶掛としてとりあげられるようになりました。

2章　侘びの大成―利休好み

珠光・紹鷗が先鞭をつけた侘茶は千利休（1522－91）によって大成されます。堺の商家に生まれた利休は若い頃から茶に親しみ、堺の商人たちとの茶会を通じて創意を高め、織田信長（1534－82）、豊臣秀吉（1537－98）ら天下人の茶頭（茶事をつかさどる役）へと昇ります。

利休が果たした役割として特筆されるのが、自らの茶の湯の精神にみあう「好み」の道具を制作させ、茶会で用いることで新たな茶風を巻き起こしたことです。利休好みの茶道具の筆頭にあげられるのが陶工の長次郎に命じて作らせた楽茶碗**（No.8）**で、ゆるやかな曲線のシルエットを持つ椀形でなく筒形であることが特徴です。加えて、轆轤を使わずに手づくねで成形したことも革新的で、これにより、すっぽりと手の形にフィットする器が実現したのです。

こうした利休の創意は、天正11年（1583）に秀吉のために茶室「待庵」（京都・妙喜庵内）を建てた頃から顕著になり始めます。この茶室では伝統的な四畳半の広さが二畳に縮小され、壁や柱にもあえて入念な仕上げをほどこさない素朴な材が用いられました。利休好みの茶道具の特徴として、すっきりとした端正な形状と黒を基本とした色調などがあげられますが、これは待庵のような狭く薄暗い茶室での使用にこそ相応しいといえるでしょう。黒塗中棗**（No.9）**は高さと胴径が同じに作られた器形や暗く沈んだ色感が利休好みにかなっており、彼のもとで漆器制作を行っていたとされる盛阿弥の作という伝承を持つのも頷けるところです。

利休好みの茶道具は、彼の在世中はもちろん死後も強い影響力をもち、永らく規範として参照されました。**No.10**の茶杓共筒は利休の養子である千少庵（1546－1614）が自ら削ったもの。茶杓は竹の節をどこに置くか（あるいは節を避けるか）によって、いくつかのスタイルに分かれますが、中央に節を置く中節は利休が初めて作ったといわれ、以後、主流となります。また、竹筒に花窓を切り抜いた花入**（No.11）**も利休の創意に倣うものです。竹筒を花入に用いること自体は紹鷗の時代には行われていましたが、流行の立役者となったのはやはり利休だったようです。

3章　へうげもの―織部好み

利休が巻き起こした新たな茶風の継承者となったのが、古田織部（1543－1615）です。美濃の武将の息子に生まれた織部は、初め織田信長に仕えます。織部の名前が初めて茶会記にあらわれるのは天正12年（1584）のこと（『天王寺屋茶会記』同年10月15日）で、本能寺の変を経て秀吉に仕え始めた頃にあたります。利休との交流もこの頃から本格化するようで、彼が茶道具に種々の創意を発揮する様をつぶさに眺めていたようです。

このような織部が、利休の後継者たる「茶の湯名人」とみなされるようになったのが慶長4年（1599）頃（『多門院日記』同年3月22日）。天正19年（1591）に秀吉の怒りに触れた利休が切腹を命じられてから数年を経た後のことでした。侘び茶を継承しながらも、武家の時代にあわせた力強く明るい茶風は、徳川家康（1543－1616）や二代将軍となった秀忠（1579－1632）によって高く評価されました。

今日、織部好みと聞いて誰もが想像するのが、自身の名を冠した織部焼、すなわち、16世紀末から17世紀初めにかけて美濃地方（現在の岐阜県南部）を中心に制作された陶器ではないでしょうか。織部焼の名称は、古田織部の死後かなり時がたってから使われるようで、彼がこの陶器の生産にどの程度関与したのかははっきりしないところもあります。ですが、慶長4年（1599）に行われた自身の邸宅での茶会において織部が用いた茶碗が「ヒツミ候也、ヘウケモノ也」（『宗湛日記同年2月28日』）と評されているのは示唆的で、これを織部焼と理解するのが一般的です。

「ヒツミ」とは歪みのこと、そして「ヘウケモノ」は「剽げた」、すなわち「おどけた」「ひょうきんな」を意味します。こうした形容詞にあてはまる茶碗を求めてみると黒織部沓茶碗　銘「浜千鳥」**（No.12）**や黒織部筒茶碗　銘「さわらび」**（No.13）**に思い当たります。特に**No.12**は、上下の起伏に富んだ口縁や強く歪んだ胴など「ヒツミ候」と評するに相応しい特徴を備えています。加えて、茶碗をのぞき込むと格子模様が施されているのも見逃せません。客人は器の形にまず驚き、そして、茶を飲み終えて模様を発見してさらに驚くという趣向が凝らされているのです。こうした遊び心が「ヘウケモノ」という評価につながったことは想像に難くありません。器面をキャンバスに見立てて自由な絵付けをした織部隅切透鉢**（No.14）**も遊び心を感じさせる織部好みの道具といえるでしょう。

そして、この織部好みを考える上でもう一つ重要な要素となるのが、織部焼を生産した美濃地方以外でも同様の感覚を志向した茶道具が作られていること。歪みの造形を持った伊賀種壺花入**（No.15）**がその好例です。織部の登場により、茶人の好みは個人の嗜好といったレベルをはるかに超えた、時代様式とも呼びうる地域的な広がりを持った美意識へと昇華されるに至ったのです。

4章　きれいさび―遠州好み

将軍や諸大名に評価された織部でしたが、徳川幕府によって泰平の世が築かれつつある中で、彼の茶風は時代にそぐわないものとみなされるようになったようです。

こうした中、織部とは異なる「きれいさび」といわれる優美な茶風を展開したのが小堀遠州（1579－1647）です。

近江で浅井家に仕えた正次の子に生まれた遠州は、豊臣秀吉に仕えて京へ移り、古田織部から茶を学びます。また、江戸幕府では建物の造営を司る作事奉行として駿府城をはじめ多くの重要建造物に関わり、建築や作庭の手腕が高く評価されました。

茶人であり、なおかつ幕府の官僚でもあった遠州にとって泰平の世に相応しい新たな茶風を生み出すことは重要な課題であったでしょう。おりしも、江戸時代に入って新たに為政者となった大名たちは、自身の文化的素養を示したいという思いもあり茶の湯にはげみましたが、彼らにとって既に価値の定まった茶道具の名品を入手するのは困難なことでした。

こうした大名たちの茶事をいかに支えるのかも頭の痛い問題であったといえます。その解決策となったのが評価の定まっていない茶道具に新たな価値づけを行うということでした。具体的には、茶道具の次第（牙蓋、仕覆、箱などの付属品）を遠州自らが整え、その道具が名品であるというお墨付きを与えたのです。

その様子を示す好例として、唐物茶入　銘「博多文琳」**（No.16、黒田資料）**と黒田忠之に宛てた遠州の書状**（No.17、黒田資料）**をご紹介します。黒田家二代藩主忠之（1602－1654）は寛永元年（1624）に神屋宗湛から**No.16**を召し上げます。その後、忠之は次第のあつらえを遠州に依頼したようで、**No.17**は遠州が忠之に宛てた書状です。そこには、博多文琳の仕覆（袋）として「しまのきれ」を用いたこと、そして、そのきれは別の茶入の仕覆にも使うので残しておいた方が良いことなどが記されています。この書状から遠州が「しまのきれ」を高く評価していたことが読み取れますが、興味がわくのは現存する博多文琳の仕覆にこの「しまのきれ」を用いたものがあるのかという点ではないでしょうか。結論から申し上げると、はっきりとしません。「しまのきれ」を「縞のきれ」つまり縞模様のきれと考えると、該当する仕覆はありません。ですが、「島のきれ」つまり南アジアを中心とした地域で作られたきれということであれば、１つ思い当たります。モール仕覆**（No.18）**がそれで、インドのムガール朝の時代（1526－1858）に制作された染織品が日本へ舶載され、ムガールが訛ってモールと称されるようになったといわれます。このモール仕覆が遠州のいう「しまのきれ」に該当するかどうかは今後の検討に委ねなければなりませんが、１つの可能性としてお示ししておきたいと思います。

いずれにせよ、上記のやりとりから分かるのは、遠州が自らの美意識によって、茶道具の次第を整え、大名道具に相応しい格付けを行っていたという事実でしょう。そのことは、博多文琳がこれ以後、黒田家秘蔵の家宝とされ、破れた仕覆さえも大切に保管されていることからも裏付けられると思います。

それから、茶道具に新たな価値づけを行う方法として、古典文学を題材にした歌銘を付けることもありました。これにより大名たちは、茶の湯を介してかつて

茶人の「好み」

2019.7.30（火）-9.29（日）

会場：松永記念館室

・作品番号は展示の順序とは必ずしも一致しません。
・◎は重要文化財を示します。
・前期の記載がある作品は、7月30日（火）～9月1日（日）まで、後期の記載がある作品は9月3日（火）～9月29日（日）までの展示です。
・都合により展示作品を変更する場合があります。

出品作品リスト

No		作品名	作者名・産地	時代・世紀	品質	コレクション	所蔵番号
1		建盞天目茶碗	建窯	南宋時代 12-13世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-69
2	◎ 前期	五祖荷鋤図	伝・牧谿（13世紀）、 樵隠悟逸 （1262-1335以降）賛	元時代　14世紀	紙本墨画	松永コレクション	6-B-2
3	後期	布袋図	伝・胡直夫（13世紀）、 偃谿広聞 （1189-1263）賛	南宋時代　13世紀	紙本墨画	松永コレクション	6-B-3
4		雨漏堅手茶碗 銘「天野屋」		朝鮮王朝時代 15-16世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-70
5		信楽檜垣文壺		室町時代　15世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-42
6	◎ 前期	送別偈　幽禅人宛	古林清茂 （1262-1329）	元時代　14世紀	紙本墨書	松永コレクション	6-I-4
7	◎ 後期	偈（七言絶句）	月江正印（1267-?）	元時代　14世紀	紙本墨書	松永コレクション	6-I-5
8		黒楽茶碗 銘「次郎坊」	長次郎（生没年不詳）	桃山時代　16世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-62
9		黒塗中棗	盛阿弥（生没年不詳）	桃山時代　16世紀	木胎漆塗	松永コレクション	6-Hb-55
10		茶杓　共筒	千少庵 （1546-1614）	桃山時代　17世紀	竹製	松永コレクション	6-Hf-75
11		竹一重切花入 銘「普化」	千宗旦 （1578-1658）	江戸時代　17世紀	竹製	松永コレクション	6-Hf-91
12		黒織部沓茶碗 銘「浜千鳥」		桃山時代　17世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-71
13		黒織部筒茶碗 銘「さわらび」		桃山時代　17世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-66
14		織部角切透鉢		江戸時代　17世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-48
15		伊賀種壺花入		桃山時代　17世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-93
16		唐物茶入 銘「博多文琳」		明時代　15-16世紀	陶器	黒田資料（特別出品）	4-Ha-3
17		書状　黒田忠之宛	小堀遠州 （1579-1647）	江戸時代	紙本墨書	黒田資料（特別出品）	4-I-5
18		モール仕覆 唐物茶入 銘「博多文琳」付属		ペルシャ・ サファヴィー朝時代か 17世紀	絹	黒田資料（特別出品）	4-Ha-3
19		瀬戸肩衝茶入 銘「辰市」		江戸時代　17世紀	陶器		14-Ha-51
20		和歌「辰市」	小堀遠州 （1579-1647）	江戸時代　17世紀	紙本墨書		14-Ha-51
21		高取掛分下面取茶碗	白旗山窯	江戸時代　17世紀	陶器		14-Ha-82
22	◎	色絵吉野山図茶壺	野々村仁清 （生没年不詳）	江戸時代　17世紀	陶器	松永コレクション	6-Ha-50

Taste of Tea Masters

- Number on the list do not necessarily correspond to the order in which they are displayed.
- “◎”denotes an Important Cultural Property.
- “first half” on view 7/30-9/1. “last half” on view 9/3-9/29.
- Works on display may change without notice.

Jul 30th, 2019 – Sep 29th, 2019

Venue: Matsunaga Memorial Tea Ceremony Collection

Free Translation

List of exhibits

No		Title	Artist / Produced area	Period / Century	Material	Collection	Accession number
1		Tea bowl, tenmoku type	Chien ware	China, 12th -13th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-69
2	◎ first half	The fifth Zen patriarch	Attributed to Muxi (13th century) , Inscription by Qiaoyin Wuyi (1262-1335-?)	China, 14th century	ink on paper	Matsunaga Collection	6-B-2
3	last half	Hotei, god of fortune	Attributed to Hu Zhifu (13th century) Inscription by Yanxi Guangwen (1189-1263)	China, 13th century	ink on paper	Matsunaga Collection	6-B-3
4		Tea bowl known as "Amanoya", amamori type		Korea, 15th -16th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-70
5		Jar with cross-hatch pattern	Shigaraki ware	Japan, 15th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-42
6	◎ first half	Chinese farewell verse	GULIN Qingmao (1262-1329)	China, dated 1326	ink on paper	Matsunaga Collection	6-I-4
7	◎ last half	Chinese verse	YUEJIANG Zhengyin (1267-?)	China, 14th century	ink on paper	Matsunaga Collection	6-I-5
8		Tea bowl known as "Jirobo", Kuro-raku type	Chojiro (?-?), Raku ware	Japan, 16th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-62
9		Natsume tea caddy	Seiami (?-?)	Japan. 16th -17th century	lacquered wood	Matsunaga Collection	6-Hb-55
10		Tea scoop and case	SEN no Shoan (1546-1614)	Japan, 17th century	bamboo	Matsunaga Collection	6-Hf-75
11		Flower vase made of bamboo known as "Fuke", hitoe-giri type	SEN no Sotan (1578-1658)	Japan, 17th century	bamboo	Matsunaga Collection	6-Hf-91
12		Tea bowl known as "Hama-chidori", Kuro-oribe type	Mino ware	Japan, 17th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-71
13		Tea bowl known as "Sawarabi", Kuro-oribe type	Mino ware	Japan, 17th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-66
14		Square bowl with openwork, Oribe type	Mino ware	Japan, 17th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-48
15		Flower vase	Iga ware	Japan, 17th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-93
16		Tea caddy known as "Hakata Bunrin", bunrin type		China, 15th -16th century	pottery	Kuroda Family Treasures	4-Ha-3
17		Letter on the tea caddy known as Hakata Bunrin	KOBORI Enshu (1579-1647)	Japan, 17th century	ink on paper	Kuroda Family Treasures	4-I-5
18		Tea utensil cover made of mogul textile		Iran, 17th century	silk	Kuroda Family Treasures	4-Ha-3
19		Tea caddy known as "Tatsunoichi”, katatsuki type	Seto ware	Japan, 17th century	pottery		14-Ha-51
20		Ancient poem, known as "Tatsunoichi”	KOBORI Enshu (1579-1647)	Japan, 17th century	ink on paper		14-Ha-51
21		Tea bowl with half cylinder shape	Shirahata-yama kiln, Takatori ware	Japan, 17th century	pottery		14-Ha-82
22	◎	Tea leaf jar with design of Mt Yoshino	NONOMURA Ninsei (?-?)	Japan, 17th century	pottery	Matsunaga Collection	6-Ha-50